
伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第 38 号 2006 年 4 月

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学文学部 荻原眞子研究室

Tel/Fax : 043-290-2310

グローバリズムのなかの口承文芸

石井正己

千葉大学の国際研究集会助成を受けて、3月3日、同大学で、初めての国際研究フォーラムが開催された。年度当初の事業計画では予定されていなかったため、荻原眞子会長の意志を受けて実行委員会が組織された。新しいことを実行する場合には多くの困難が伴うものだが、事務局のサポートも実に行き届いていた。多彩な参加者を得たこのフォーラムは、学会の今後を占うにちがいない画期的な事業になったように感じられる。

今回のテーマは「グローバリズムのなかの口承文芸」だが、今、われわれは冷戦終了後のさらなる混迷の時代にあって、個々の問題を世界規模で議論しなければ、もはや解決できない状況を迎えている。口承文芸は政治や宗教、経済などに比べれば遥かに弱者だが、生きた言葉が人々の暮らしに果たす役割は計りしれない。そうしたことを考えるなら、今回のテーマは、21世紀における口承文芸の最も重要な研究課題になるにちがいない。

冒頭、ロシアのV・M・ガツァーク氏（通訳・熊野谷葉子氏）から、「フォークロアの遺産、継承とフォークロア後の創造の諸形態（グローバリズムにおける複合的な機能と意義）」という、総論的な報告があった。それを受けて、中国のダウ・タヤ氏から「中国における『ジャンガル』とその研究」、坂井弘紀氏から「21世紀の叙事詩語り～中央アジア・カラカルパクを例に～」、真下厚氏から「奄美・沖縄における口承文芸の現状」、北原次郎太氏から「アイヌ語口承文芸を聞く・語る 近年の事例」の報告があり、各地域の現状が明らかにされた。後半は活発な意見交換がなされたが、時間が足りなかった。

思い起こせば、これまで日本の口承文芸研究は昔話を中心に進められてきたところがあるが、今回は特に、叙事詩（柳田国男の言う語り物）の現状と課題について、国際的な認識が深められたように思われる。ガツァーク氏は「口承文芸はお金では買えないほど大切なものだ」と言われたが、この一言はやはり重い。この言葉を共通認識にして、さらに対話を重ねてゆくには、フォーラムをこれで終わらせてはならない。議論はまだ始まったばかりで、課題は今なお宙づりのままにある。

（東京都）

国際研究フォーラム 報告
「グローバルズムのなかの口承文芸」

2006年3月3日(金)10時-17時半
千葉大学社会文化科学研究科2階マルチメディア会議室

剣持弘子

2006年3月3日、千葉大学において、標記の研究フォーラムが行われた。これは、日本口承文芸学会が創設30周年を記念して、千葉大学「国際研究集会助成」を受けて開催されたものである。

パネラーとして、国外からはV・M・ガツァーク氏(ロシア科学アカデミー世界文学研究所フォークロア部部长)と、ダワ・タヤ氏(中国・内蒙古大学蒙古学学院助教授)が参加され、国内の3氏、真下厚氏(立命館大学文学部教授)、坂井弘紀氏(和光大学表現学部専任講師)、北原次郎太氏(アイヌ民族博物館学芸課学芸員)とともに午前午後に亘って熱心に報告がなされた。司会は石井正己氏(東京学芸大学人文社会科学系教授)、ガツァーク氏の通訳は熊野谷葉子氏であった。タヤ氏の報告は日本語でなされた。

報告はガツァーク氏の総論ではじまった。



本題に入って、氏は三つの概念を示された。

- 1, 伝統的古典的なフォークロア
叙事詩、昔話等。
- 2, 伝統的なものに今日的な新しい要素が加わったもの
現代の子どものフォークロア。怖がらせる話など。伝統的なフォークロアの作り替えなど。
- 3, 今、目の前で起こっている現象。
現在の都会のフォークロアのセミナーから誕生したもので、重いテーマの冗談など。

ガツァーク氏が、この三つのうち、最も高い地位を与えるのは、1, の伝統的古典的なフォークロアである。たとえ現場から消滅したとしても、その価

値がなくなるわけではない。この点に関して、氏はその後の発言の中でも、ホメロスの例などを挙げ、たびたび強調された。

さらに、今日の、音声、映像などの技術の効果などにも言及された。

二人目のタヤ氏は、「中国における『ジャンガル』とその研究」と題し、中国、モンゴル、ロシアなど広範囲にまたがって伝承されたモンゴル族の英雄叙事詩『ジャンガル』について、1, 語り手、2, 蒐集と出版、3, 研究 に分けて報告された。ジャンガルとは主人公の英雄の名前だそうである。

語り手には、聞き伝えを守る伝統的な語り手と、録音されたり、文字化されたテキストから覚えた語り手があり、後者が増えてきているということであった。

文字や、テレビ、ラジオなどのメディアの普及に加えて、市場経済の影響や学校での漢語教育も関係しているようである。

出版事業も盛んであるが、口承をもとにしたテキストではない。だが、オリジナルなテキストの意義を認識する研究者が増えてきているということであった。

三番目は、日本人の身で、中央アジア・カラカルパクの英雄叙事詩を研究される坂井氏の「21世紀の叙事詩語り～中央アジア・カラカルパクを例に～」と題する報告である。

遊牧系民族はとくに、さまざまなジャンルの口承文芸を発達させ、中でも英雄叙事詩は民族のアイデンティティ形成の役割を担い、歴史を伝えてきたという。

ソ連崩壊によって独立した中央アジア諸国では、団結と独立のテーマをもつ英雄叙事詩は、国民統合のシンボルとして重要な役割を果たしているという。ウズベキスタン共和国に帰属するカラカルパクでも、国際会議や記念行事や出版事業など国家の政策にも取り込まれながら、民族楽器コブズの伴奏による伝統的な語りば消滅してはならず、若手の活躍も見られるということである。

四番目は、真下氏による、「奄美・沖縄における口承文芸の現状」の報告である。

まず、昔話伝承の現状が報告された。福田晃氏等による『南島昔話叢書』(同朋舎出版)に窺えるように、宮古諸島の本格昔話の伝承は、他の沖縄諸島には見られないほど円熟したものであり、その伝承意識は「知恵のある話」ということである。

伝承の場は、他の伝承地と同様、一家団欒、夜なべ仕事、その他、昼間の仕事の合間等、あるいは子

ども同士の遊びの中でということである。だが、現状は厳しく、それらの語りの場の消滅や、方言の衰退と共通語化という事情に加え、昔話にたいする意識の変化、つまり昔話の知恵という意識が衰退し、もっぱら聞き手は子どもへと移っているというのは、他の地域にも共通する事情であろう。

他に、呪詞伝承、歌謡についての報告の他、民俗芸能のなかの言語表現についても言及があった。

五番目は、北原氏の「アイヌ語口承文芸を聞く・語る 近年の事例」と題する、アイヌ語とアイヌ口承文芸の危機と、それらにたいしてとられてきた対策についての報告であった。

アイヌの置かれた厳しい状況の中で、アイヌ語を話せる者が減少し、その結果、口承文芸の伝承が危機にさらされた。入れ替わるように研究者が登場し、文字や音声による記録がはじまり、そして学習がはじまる。それらのさまざまな場での成果が報告された。

以上5氏、それぞれ視覚メディアを使っでの丁寧な報告であった。

会場からの発言は、モンゴルの研究と出版状況についての長時間にわたる報告の他に、例えば、テキストを覚えて語る試みや、今でも盛んに話される、怖い不思議な話、それに、ネットを通じての噂話のひろがりや「電網」と名付けるなど、主に、口承文芸の現場の新しい現状報告であった。それはそれで面白く有意義ではあったが、はたしてそれらの中で後世まで文芸として命永らえる伝承はどれほどあるのだろうかという疑問は残る。そして、残念ながら、ガツァーク氏の最も評価された伝統的古典的なフォークロアについての発言はなかった。

司会者によると、柳田が昔話を重視しすぎたのにたいして、今回は叙事詩を扱ったということであったが、その叙事詩の運命も、おそらく昔話と同様、自然にまかせておいては消滅の危機にさらされるだろう。すでに、政策やその他人為的な保護がなされているようである。

しかし、昔話も叙事詩も、口頭伝承からは後退しても、記録されたものの価値は消えることはないというガツァーク氏の主張は重要である。そして、今回のパネラーによれば、叙事詩だけでなく昔話も、モンゴルや中央アジアではまだ語り手は活躍しているが、それを記録し、助成する態勢にはないという。昔話はまだ生きているのに、それを遠くにいる者が知る手だてが失われているということである。叙事詩は民族を越えて伝播することは少ないが、昔話はどこまでもひとり歩きし、それぞれの地域に応じて

変化する。だからこそ面白い。その足取りが完全に解明されれば、どんなに面白いことが見えてくるであろうか、それは、昔話だけでなく、他の文化にも関わる足取りであろう。伝承がまだ完全に消滅していない今、記録は急がれる。今後の「グローバルな」視点には、ぜひ昔話も復活させたいものである。

(神奈川県)



第50回研究例会 報告

伝説研究の新潮流

2005年10月29日(土) 13時~16時

国立歴史民俗博物館 大会議室

齊藤 純

今回のテーマ「伝説」は民俗学の初期からの研究対象である。その先駆者の柳田國男は、登場人物・時代など、個々の伝説の設定にある固有名詞を排し、類型と対象物の共通性(聖地・聖物)に注目した。これにより伝説は「誤った歴史」ではなく、固有信仰を解明する資料という地位を獲得する。が、原型や信仰を強調するあまり、伝承する側の多様な動機や意識が軽視されがちだった。最近の歴史研究を見ると、歴史の語られ方、歴史意識などが問題になっ

ている。こうした状況において、伝承者にとって「歴史」であった伝説を、再び考え直す必要があるのではないか。以上のような趣旨説明が例会担当の小池淳一氏（国立歴史民俗博物館助教授）からあった。

最初の報告は達志保氏（愛知県立大学非常勤講師）の「比較の視点から 渡来人伝説をめぐって」古代に中国から東海に船出した徐福の伝説を取り上げる。その後日談として韓国・日本で渡来伝説が語られ、伝承地は日本で20数ヶ所、なお増加中という。徐福伝説の特徴は、日中韓に伝承があり、相互に関わりを持つ点である。筆者には、日中国交正常化が伝説の発達や普及に影響したこと、韓国で伝説の証拠品を消滅させたのが植民地時代の日本工場とされていること、中国の競合する徐福誕生伝説地が、日本への記念品の贈答によって正統性の獲得合戦を展開していることが興味深かった。現在の渡来人伝説が広い国際関係の中にあることが理解できる。なお、報告者は、伝説の管理者だけでなく、郷土史家・地域振興者・愛好家など、伝説に主体的に関わる人々を「伝説主体」として扱うことを主張した。この点について、そこからの展望が不明という反応がフロアからあった。筆者には「伝説主体」という用語に問題が感じられた。

次の内藤浩普氏（國學院大學兼任講師）「文芸の視点から 静御前伝説において」は、長刀を持った静御前像の成立・展開を報告した。白拍子の舞の採物、鍛冶の「志津」氏など、伝承像への影響要因が検討された。興味深いのは、中世に戦場の武器だった長刀が、近世、女性の護身具になるに従い、長刀を持つ静御前像が出現したとみられる点である。近世の婦女教育では、夫・家への忠義が重視され、その徳目のシンボルという役割が長刀と静御前の結合に見て取れる。なお、報告では、絵画など視覚像と伝説の関係にも言及があり、その点についてフロアから質問・確認があったが、口頭による発表形態と時間の制約で十分展開できなかったのは残念だった。

最後の佐藤喜久一郎氏（慶応義塾大学院社会学研究科研究生）の「歴史の視点から 『山賊』伝説とその系譜の創出」は、碓氷峠周辺の「山賊」にかかわる伝承を扱った。中世の「山賊」像が近世に変質し、近世秩序の対立者という役割が投影されるのだが、その中でなお「山賊」の子孫と主張する由緒を伝える家々がある。その実態を報告し、意味を考察した。伝承の物語性と逸脱を説明できない従来の由緒論の問題点、民俗の世界を背景にした由緒解読の可能性、由緒作成に見られる「伝承の類似を血縁関係に読み替える独特の合理化」など、注目すべき

指摘があった。が、問題の大きさのため、個々の説明に尽くされない点が残り、丁寧な再論が期待される。

以上、伝承実態の多様性に応じた研究が展開し、伝説研究が新段階に入ったことが明らかである。ただ、実態の豊かさを謳って従来の研究の狭さを批判し、それを結論とする論調は、実はオールマイティのやり口でいつまでも許されるものではない。筆者を含め、それぞれ新たな課題の提示が求められている。それを借物でなく示そうとするなら、実態の中に新しい謎や疑問を見つけること。そこから始まるのではないか。そんなことを感じた。（奈良県）



第51回研究例会 報告

昔話を聴き続けて

『昔話採集家』・佐々木徳夫氏の半世紀から

2006年3月4日（土）13時～17時30分

千葉大学社会文化科学研究科2階マルチメディア会議室

高塚さより

ここ数年、日本民俗学会をはじめ様々な研究会などで、それらの草創期を担った研究者や研究会の回顧を通して研究史を再考する試みが行なわれてきた。本例会の趣旨は、企画者（飯倉氏・高木氏）により、事前に会員に配布されたが、下記の点において、斬新かつ興味深い。一つは、対話による回顧という方法である。これは、研究者の軌跡を、単に過去の実践として確認するだけでなく、いま・この研究を切り開く「展望」を導き出すために選ばれた方法（＝フィールドワーク）だった。当日の会場では、インタビューだけでなく、会員一人一人が佐々木氏と対峙する感覚を持ったのではないだろうか。二つめは、佐々木徳夫氏という選択である。これまでの回顧は、中央の学会や大学などで中心的な立場を担った研究者が殆どだったが、今回は、それらとは距離のあるところで、しかも独学によりフィールド

ワークを続けている在野の「昔話採集家」を選んだことである。これらは「昔話採集家」との、勿論ある種の演出を含んだ問いと対話を通して、「昔話採集」の方法とその形成・自覚・発展の経験を探り、「名人芸」と言われる技に迫ろうとする試みであった。そこには独学であるが故に「口承文芸する身体の方法」や「昔話集の方法」とされる口承文芸を聴くという行為の原形のようなものが浮き彫りになるのではという期待もはらんでいたかもしれない。例会の現場では、インタビュアーの問いに佐々木氏が応え、「昔話採集家」となるまでの形成・自覚・発展の経験が語られた。断片的になるが整理・報告する。

【素地とはじめの一步】 恩師田部重治氏(登山家・英語教師)の語った「どんな田舎にいても研究の対象はどこにでも転がっている」という言葉が心の中で行き続けていた。行動に移す直接のきっかけは、ラジオで民間信仰を調べている人の紹介を聞き、自分も調べてみようと思ったことだった。農村のことなら知っていると思っていが農民の知恵を再発見し、ノートに書きとめはじめた。

【何を】より「どのようにに】 昔話という対象や民俗学が先にあったのではなく、何か一つのことにコツコツと打ち込む性格、納得のいく毎日が過ごしたいという気持ちや自分の足で実証したいという思いなどがあつた。結果的にそれが昔話採集につながつた。(規制の学問としての出発ではなかつた)

【歩くことでの発見、こだわりと方法】 一旦対象が昔話に定まると、とことん聞いて独自の昔話観が形成された。昔話は語られた時間内にしか存在しないその場その場の表現、ゆえに音・言葉にこだわつた。そして筆記に限界を感じ早くからテープ録音を導入する。いい語りを聴くためにはいい聞き手でないといけない。例えば、聞き手には、さぐりを入れるという技、語り手の語る意欲や語り手のリズムの大切にすることが求められる。その他、聴き書きの場や聞き手・語り手への理解、後世へ伝える意義などが語られた。

コメンテーターの野村純一氏は、「昔話研究史において佐々木徳夫氏をどう位置づけるか」という問題提起とともに、佐々木氏の昔話観に対する評価を述べた。根岸英之氏からは、言葉へのこだわり・昔話への思い・学会に対する意識などの問いが投げかけられた。

会場からの様々な問いは、昔話採集者としての佐々木氏のこと、村落社会や言葉などフィールド側の問題の二つに大別された。それらに応じた中か

ら、

- ・言葉や表記へのこだわり
- ・「我たたずんば」という昔話採集への強い思い
- ・採集も昔話集も人間関係の中で捉えていること
- ・採集 昔話集を出すという意識の強さ
- ・昔話は自分の体をこして語るものという昔話観

といった佐々木氏の考えを聞くことができた。また、艶笑譚着眼のきっかけや、生活や人生と結びつけて表現していこうとする現在の心境や姿勢も語られた。

会員の佐々木氏の業績と本企画に対する関心の高さを感じた。各人が、佐々木氏の話に何を聴き、どのような問いを抱いくことができたのだろうか。佐々木徳夫氏という昔話採集家に魅了されたのは私だけではないだろう。今後の口承文芸研究を切り拓ききっかけとなる例会だった。(神奈川県)



事務局より

《新入会員》

遠藤志保（千葉県）、斯琴（千葉県）、高野實貴雄（埼玉県）、光畑隆行（神奈川県）

《退会》 寺島鉄夫、森明子、岩間千佳、高橋貞子

《物故》 村崎眞智子（2006年1月）、遠藤庄治（2006年3月）

《寄贈図書・会報》

- ・ 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第38巻4～12号
- ・ 日本民話の会『日本民話の会通信』No.181～184
- ・ 柳田國男記念伊那民俗学研究所『伊那民俗』第63号、第64号
- ・ 日本民俗学会『日本民俗学』244
- ・ 一柳廣孝・吉田司雄（編著）『ナイトメア叢書 ホラー・ジャパネスクの現在』青弓社
- ・ 立石憲利『聴く・語る・創る第12号 兵庫県南但馬の民話 養父・朝日敏雄の伝承』
- ・ 『国立歴史民俗博物館 研究報告』第126集、第129集

日本口承文芸学会主催「国際会議」に関する事務局提案

本年3月3日に千葉大学において国際フォーラム『グローバリズムのなかの口承文芸』を開催しましたが、これは偶々大学の国際研究集会助成によって実現したものですので、今後、本学会主催による国際会議、フォーラム、シンポジウム等の開催を推進するために、事務局では文科省科研費の研究成果公開促進費「研究成果公開発表（C）」の利用を提案します。具体的な要領は以下の通りです。

- 1) 会員から国際シンポジウム等の案（書式は科研の応募書類に準ずる）を募る。
- 2) 10月の運営委員会でそれを審議し、承認されたものについて学会名で科研申請（例年11月中旬）を行う。
- 3) 翌年春、採用決定の場合には提案者を中心に実行委員会を設け、学会主催として開催する。

国際的な学会活動の展開によって海外の研究者や学会等との交流を進めるためには、会員のみならずさまのいっそうの理解と協力が必要です。本提案については、来る6月の第30回大会における総会でお諮りする予定ですので、予めご検討くださいますようお願いいたします。

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学文学部 荻原眞子研究室内

Tel & Fax : 043-290-2310 / e-mail : shinko@bun.L.chiba-u.ac.jp

学会ホームページ : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/sfnrj/>